

生態史クロニクル

地域生態史プロジェクトにおける「生態史連携作業グループ」の立ち上げに向けて
秋道智彌・久保正敏・田口理恵・兼重努・西本太・宮脇千絵

Toward a Rising of Eco-History Collaborative Working Group (EH-CWG) in the Study of Regional Eco-History Project

Tomoya AKIMICHI, Masatoshi KUBO, Rie TAGUCHI, Tsutomu KANESHIGE, Futoshi NISHIMOTO, and Chie MIYAWAKI

アジア熱帯モンスーン地域における地域生態史研究と「生態年代記」、「稲作・漁労文化複合」、「プロキシ研究」
秋道智彌（総合地球環境学研究所）

Eco-Chronicle, Cultural Complex of Rice-Cultivation and Freshwater Fishery, and Proximal Approach in the Study of Regional Eco-History in the Tropical Monsoon Asia

Tomoya AKIMICHI (Research Institute for Humanity and Nature)

「アジア熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945－2005」（以下、生態史プロジェクトと略称する）では、アジアの亜熱帯・熱帯地域を対象として、自然と人間との相互作用とその歴史を解明することを大きな目的としている。すなわち、自然と人間との関わり（＝生態）は閉鎖された社会や自己完結した世界のなかで営まれてきたのではなく、外部社会との不断の交渉や人間の移動などが自然との営みを変容させ「地域」を形成してきた。その地域も時間的に変動してきたことは明らかであり、ここに地域の生態史を探る重要性が浮かび上がるのである [川田・大貫編 2000]。

本プロジェクトでは、生活の基盤となる生業複合、資源の利用と管理に関する活動・慣行・制度とともに、人間の身体に刻まれた環境要因として栄養と健康に注目し、これらの側面を詳細に調べ、第二次大戦後の時間的・歴史的な変容を統合的に分析することを研究の中核においている。

上に掲げた3つの側面についての研究からえられた結論を、地域生態史のなかでしかるべく意味づけておく必要がある。個別研究をいくら積み重ねても全体への見通しがなければ貢献度は低いといわざるをえない。そこでまず、分担研究者は個々の研究分野に依拠しながらも、得られた研究成果が地域生態史の研究のなかで時間軸（＝歴史）と空間軸（＝地域）に照らしてどのような意義をもつのかについて独自の意味づけにむけての挑戦を試みるべきだろう。

個々の積み上げが第一義的に重要であるとしても、アジア熱帯モンスーン地域における地域生態史を捉えるための見取り図なり骨組みはやはり必要不可欠であるという認識から、その方策についてこれまで議論を重ねてきた。その結果、研究代表者として、地域生態史の基本的な枠組となるデータブックを早急に作成することが重要であり、このデータブックを参照しながら個々の研究成果をより広い視野へとつなぐ資料として活用していただきたいと考えた。

具体的な作業として、1. 生態年代記、2. 稲作・淡水漁撈文化複合、3. プロキシによる研究の3つのデータブックを提案し、これらの基礎資料を作成するための協同作業をおこなうため、作業グループ（EH-CWG: Eco-History Collaborative Working Group）への参加を呼びかけたい。以下にふれるように、生態年代記、文化複合、プロキシ研究の必要性は過去2年間における議論と研究を踏まえて提案されたものであり、生態年代記についてはすでにその作業を平成16年度に開始していることをことわっておく。

1-1. 歴史・時間軸におけるエコ・クロニクル（生態年代記）

時間的な枠組みとして設定したいのが、生態学的な歴史的事象を編年的に編纂するエコ・クロニクル（生態年代記）である。従来この分野は、「環境史」（environmental history）として扱われてきた。そこでは自然災害、環境変動、異常気象、特筆すべき人為的な環境改変、環境関連法の制定などの項目が時系列に構成されている。近著の日本における『環境史年表』の例では、食・健康、生活一般、自然・科学、開発・公害・社会に分けて記載されている〔下川編 2003、2004〕。しかし、本研究では環境に関連する項目を集めるだけで、それがただちに生態年代記になるものとは考えていない。

生態年代記を編纂するうえで、既存の歴史書や年譜、研究成果などとともに、個々の集団や民族の歴史を調査によって明らかにするエスノ・ヒストリー（ethno-history）、碑文などに刻まれた未記載の歴史（inscriptive history）、個人の生活史を扱うライフ・ヒストリー（life history）などを多面的に利用することが必要だろう。

歴史書にどのような項目や事象が記載されているかは、その歴史書を編纂した当事者の思想や立場を反映する。歴史事実が隠蔽ないし歪曲されることもふつうである。また、調査のさいにどのような項目に注目するのは、研究者の視点や考え方によるだろう。

この点でいうと、生態年代記は個々の資料や研究内容を歴史・時間軸のなかで推定するためのものであり、いわば外挿法（extrapolation）の対象としての役割をもっている。たとえば、第二次大戦後の解放後、中国雲南省には湖南省、四川省などから大量の中国人労働者が入植し、ゴム栽培に従事した。その経緯や栽培されたゴム園の面積の経年変化などは雲南省西南地域におけるいくつもの『県誌』（中国語では『県志』）に記載されている。県ごとの状況と変遷過程はこの『県誌』をもとに追跡することができる。これらの資料を元に、特定の村落における調査によりゴム栽培が導入された時代やそれ以降の変化を確認することができるだろう。とくにかつて猖獗の地とされてきた西双版纳タイ族自治州では、入植者の疾病はどのようなものであったのか。漢人の入植が現地の水タイ族や山地のハニ族などの土地利用にどのような影響を与えたのか。さらに漢人との接触が西納版納の諸社会にどのような影響を与えたのか。すでにこのような問題意識を踏まえた研究が西双版纳でなされている〔尹・深尾 2003〕。いずれにせよ、近代的なゴム栽培の導入が入植者の健康や栄養、疾病、現地社会にどのような影響をあたえたのかについて、『県誌』の資料と野外調査を組み合わせることで地域生態史的に明らかにすることはたいへん重要であろう。

また、既存の年代記や碑文資料、エスノ・ヒストリー、ライフ・ヒストリーなどの資料から、生態年代史を構築する新たなシーズを発掘することも可能である。たとえば、雲南省西南部の徳宏タイ族ジンポー族自治州西北部にある盈江県新城蓬萊山には、中国に初めて植樹されたゴムの木がある。タイ族の人で盈江（当時、幹崖）の第24代目の土司（宣撫使）であった刀安仁は、光緒30（1904）年に訪日のさいに経由したシンガポールで、橡膠樹（*Hevea brasiliensis*）と榕樹（*Ficus* spp.）を実見した。当時、ゴムの木はイギリスのKew Gardenから1876年、1877年にはじめてマレーシア、シンガポールに導入されていた〔Burkill 1993〕。榕樹が雲南省でも繁茂することにヒントを得た刀安仁は、8,000本のゴムの苗を持ち帰った。その後の管理状態が悪く、現在では当時植えられた1本の木がのこっているにすぎない。このゴムの木の横にある碑には「中国橡膠第一樹」の記載がある。このことは、『盈江県誌』にも記載されている〔盈江県志編纂委員会編 1997:13〕。また、そのいきさつは『香港文匯報 2004』にも報道されている。

別の例を挙げよう。雲南歴史班のC・ダニエルスらは中国雲南省元江以南地域の調査から、光緒21（1893）年、普洱県把邊郷把邊村把邊上街で「藥禁碑」を発見した。その碑文には河川生物資源の保全が唱われており、19世紀末当時、村の住民が把邊江で毒を流して漁をした結果、生物資源が枯渇したので魚毒漁が禁止されたことが記されている。

魚毒の利用は世界各地に見られる。中国西南部から東南アジア大陸部ではどのような種類の植物が利用されてきたのか。ここでは詳述しないが、黄金の三角地帯の少数民族は、*Derris elliptica*、*Buddleja asiatica*（ラフ族）、*Sesbania javanica*（アカ族）、*Croton oblongifolius*（モン族）などを利用するという報告がある〔Anderson 1993〕。また、雲南省の少数民族であるジンポー族、タイ族、アチャン族、ドアン族、プーラン族は、それぞれ「則里干」、「泡」と漢語読みで呼ばれるマメ科植物を魚毒として利用する〔羅 1996〕。雲南省の南に広がる東南ア

ジア大陸部でも魚毒の利用は広く見られる [秋道 1990]。カンボジアでは少なくとも 16 種 [Pauline 2000]、マレーシアでも *Derris elliptica* をはじめとして、多くの種類の魚毒植物が利用されてきた [Gimlette 1991]。

中国では、各民族や地域ごとにおける魚毒植物の利用に関する事例を検討し、その利用を村落レベルだけでなく、地方政府や中央政府によって魚毒の利用を規制する法令が出されることがあったのか、ないのかについてさらに調査を進めることが可能である。たとえば、雲南省西南部の思茅地区では、1987～1989 年にかけて違法漁業を営んだとして 513 件が摘発され、密漁 (451)、ダイナマイト漁 (25)、電気漁 (33)、魚毒 (4) の内訳になっていることが『思茅地区志』に記載されている [思茅地区地方志編纂委員会編 1995]。魚毒漁の割合が少ないものの、依然として行なわれている点に注意したい。

生業複合と生態史に関わる問題では、ラオス北部のウドムサイ県における森林農業班の調査から明らかになったように、2000 年以降に換金作物が数種類ずつ毎年導入される変化が起こっている。トウガラシ、ニンニク、長ネギ、トウモロコシなどの産物はほかの地域ではそれ以前から導入されたことが分かっており、換金作物が導入される地域的な差異とその影響に言及できるならば、後述するプロキシ研究としても重要な手がかりとなるだろう。

また、中国におけるダム建設やメコン河を介した国境交易の進展は、メコン河の河川輸送量の変化、ラオス領内の岩盤爆破など顕著な変化として年ごとの変化として追跡することができそうだ。

中国、ラオス、タイにおける環境政策、森林政策、医療政策の経年変化も重要な課題であり、未発表の資料を各部局へのコンタクトを通じて入手し、中国の県史とは異なったアプローチによって生態史に関する資料の充実を早急に図る必要がある。

以上のように、生態史の構築に向けて多様な種類の資料を組み合わせることと、特定のプロキシを精査することにより、プロキシから人間と環境の相互作用環を探求することができる。この作業は地域生態史の研究に有効な方法と視点を提供するであろう。

1-2. 稲作文化と淡水漁撈文化の複合に関する空間分析

問題の背景

筆者はかつて、国立民族学博物館において大林太良氏を研究代表者とする共同研究「東南アジア・オセアニアにおける文化クラスターの構成と分析」(昭和 57～59 年度)と「東南アジア、オセアニアにおける文化の地理的分布とクラスター分析」(昭和 60～62 年度)に参加した(以下、クラスター分析と称する)。これは、ガンジス河以東の東南アジア地域とオセアニア地域(ハスペロネシア語系のマダガスカル島を含む)を対象として、そこに分布する諸民族文化の特徴と相互の関係を各集団がもつ文化要素の「ある・なし」をもとにした資料を統計的に分析し、諸民族文化の関係を明らかにすることを目的とした研究である。クラスター分析の研究では、237 の民族を対象とし、344 の文化要素を抽出し、既存の文献資料の記載と共同研究者の野外調査に基づく資料をくわえて分析をおこなった [大林・杉田・秋道 1990]。

この研究は、東南アジア・オセアニアの広大な地域に含まれる諸民族を対象とした民族学的な研究であるとともに、諸民族間の関係や個々の文化要素や物質文化が相互にもつ機能的・非機能的な連関(たとえば、稲作と穂摘み具の出現の有・無は機能的に相関する)ないしは複合を文化史として再構成するものであった。しかし、利用した文献や野外調査に基づく資料が歴史的な変化とどのように関連するのかについては二次資料を用いた制約上、十分に分析できなかった。さらに、対象とした文化要素の項目が結果的にかならずしも適切な領域にわたっていなかったことと、文献から読みとることのできる文化要素が一般的な内容をあらわすにすぎないものが含まれていたことから、より精緻な分析ができなかった。

その後、東南アジア・オセアニア地域における民族間関係や文化の複合について、民族学的な研究と遺伝学、先史考古学、言語学、生態学などの隣接分野との連携研究が進展し、より詳細な比較研究をおこなうことが可能となった。

こうした背景に即して、生態史プロジェクトの研究においても現地調査や実験、観察などの知見を総合的に評価するために、本地域における文化の特徴をもっともよくあらわすと思われる稲作と淡水漁撈について、民

族集団や地域ごとにその内容を詳細に検討することが地域の特性と地域内の変異、及びその時代的な変化を明らかにすることにつながると判断した。

文化項目選定に向けて

前述のクラスター分析では、稲作文化複合（RCC: Rice Culture Complex）として、以下の項目を選定した（表1）。

表1 クラスター分析における稲作文化複合（RCC）を表わす文化要素

<p>農耕：オカボ栽培、赤米、水稻栽培、階段状耕地（棚田）、焼畑耕作、堀棒、唐すき（マレー型・シナ型・インド型・人力すき）、くわ、たて杵とたて臼、ふみ臼、牛に踐ませる脱穀、高床穀倉</p> <p>家畜：ニワトリ、ブタ、スイギュウ、ウシ</p> <p>農耕儀礼：初穂刈り儀礼、刈り上げ儀礼、酒（原料・製法は問わない）</p> <p>道具・運搬具：甑、頭上運搬、頭部支持背負い運搬、天秤棒、肩掛け運搬具、木櫓（しゅら）、牛車、箆（ざる）、篩（ふるい）、箕（み）、竹製かご、把手付きかご</p> <p>集落：水利組合、季節的定住、出作り小屋、集落の象徴的中心</p> <p>宗教：穀物魂、職業的祭司、鳥占い、内臓占い、人身供犠、牛類供犠、トーテム的禁殺・禁食、上座部仏教、イスラム</p> <p>神話：天地分離神話、宇宙卵神話、太陽（射日）神話、兄弟始祖型洪水神話、地下からの祖先、犬祖神話、火盗み神話、作物盗み神話、作物死体化生神話、羽衣説話</p> <p>知識：一二支、占星師、土占い、色・方位連関</p> <p>娯楽：闘鶏、闘牛</p>
--

これらのなかで、明らかに機能的な連関を示す文化要素と、機能的には関連しないが歴史的な経緯や文化変容により共通する文化要素が混在している。

たとえば、クラスター分析で東南アジアの水田農耕と焼畑農耕の区別なく、雑穀栽培、ニワトリ、酒、木綿、竹製かご、金属製飾り輪、水稻栽培、たて杵とたて臼、すき、ブタ、ウシ、キンマ、頭上運搬、箕、篩、土器、製鉄技術（マレー式ふいご）、刀剣、盾などが指摘されている。さらに、水田農耕社会にあって、焼畑農耕社会にほとんど分布しない要素として、水田漁撈、唐すき、天秤棒、金銀細工、踏み臼、高機などがある。また、稲作文化に固有とされる高床式穀倉は雑穀栽培を行なう焼畑農耕民のあいだでも分布するうえ、牛車や犁をもたない焼畑農耕民でもウシを儀礼や財産として用いることがある〔佐々木 1990〕。

以上のように、クラスターによる文化複合は文化要素の選定にも左右されることが明らかである。たとえば、今後目指すべき稲先文化複合にとり、金銀細工と稲作栽培との機能的、非機能的な関連性についての議論はかならずしも必要ではないことになる。むしろ重要な点は、過去50～60年間における生態史を考察する上で、稲作社会にどのような変化が生じたかであり、これまでの予察によると、生業以外の物質文化について詳細な資料が報告の中に含まれていることはまれであり、むしろ、「新しい作物」の導入が中心的に記載されている点に注目しておきたい。

また、水稻・陸稲栽培における文化要素にしても、収穫における穂摘具や鎌使用の有無など、稲の品種や背丈と関連する項目が欠落していることや、初穂刈り儀礼の有無だけでなく、供犠賭してニワトリが用いられるかどうかなど、より詳細な文化の項目が研究の対象とされるべきであろう。

つぎに、淡水漁撈文化の複合（FCC: Freshwater Fishing Culture Complex）についても、同様にクラスター分析の結果を検討しておきたい。

表2 クラスタ分析における淡水漁撈文化複合 (FCC: Freshwater Fishing Culture Complex) を表わす文化要素

漁撈：弓矢、やす、もり、四手網、釜、単式釣りばり、複式釣りばり、擬餌ばり、石干見、えり、凧揚げ
 漁、魚毒、松明漁、鵜飼い漁、サメ漁、柴漬け漁、泥そり、水田漁撈、潜水漁撈・採集、漂海民
 食物：魚醤、甑
 流通：行商人、定期市
 船：いかだ、くり船、ゴンドラ型構造船、家船
 バスケット：笊、篩、竹製かご、把手付きかご
 娯楽：船競争

以上の文化要素を元に、秋道 [1990] は漁撈文化を東南アジア型、東南アジア・オセアニア型、オセアニア型などに類型化した議論をおこなったなかで、水田漁撈と魚醤油が東南アジア大陸部における淡水漁撈文化複合を考える上で重要としているが、文化要素として取り上げた水田漁撈、魚醤などの内容が一般的すぎて、地域内での変異や分布の偏りを抽出するまでには至っていない。魚毒にしても東南アジア大陸部から島嶼部、オセアニアにかけて分布するが、用いられる植物の種類が多様であることは前述したとおりである。

稲作文化については、過去、本地域において行われた稲作用の農耕具である穂摘み具や鎌などの形態の多様性の分析、ラオスにおける稲作の民族学的な調査と育種学およびDNAの手法をもちいた研究の結果と相互の討論から帰結された重要な問題提起である。さらに、稲作農耕と淡水漁労の文化的な複合が、地域に居住する諸民族集団の人口、健康などにどのような影響を与えるかについて、空間的な分布を踏まえた評価が可能である点に注目し、地域生態史の空間的な側面を考える枠組を提供するうえで重要な作業になると判断した。

本地域の主要な栽培作物であるイネや稲作に関しては膨大な研究の蓄積があり、民族ごとの栽培方法、品種、農耕儀礼などの研究がおこなわれてきた。第二次大戦後の急激な社会経済変化や緑の革命による外来の高収量イネが導入されるなかで、栽培されるイネの品種や構成、儀礼の意味などが大きく変化してきた。さらに、焼畑耕作の禁止などによる国家政策の転換が地域の稲文化を変容させてきた。つまり、イネをめぐるさまざまな文化の要素が過去数十年に大きく変化してきたと考えられる。この点は、今年度の3月末におこなった「歴史と環境」に関するシンポジウムにおいて、「緑の革命その後」を課題として設定し、いくつもの重要な議論を提示することができた。

淡水漁撈についても、これまでMRC (メコン委員会)、CIDA、JICAをはじめ国際的な援助機関を通じた魚類生態、資源管理、漁具・漁法の研究がある。また、1950年代以降、日本の研究者による漁撈の研究や漁具の収集資料があり、すでにモノと情報範囲より情報の所在情報と収集資料のデータ化が一部終了している。これらの研究から、ラオス国内における多様な漁具 (とくに釜) の存在と季節や魚種に応じた使いわけが想定されている。

しかも稲作との関連で、水田内の漁撈活動における漁具の季節的な使い分けなどと、稲作と淡水漁撈の複合である発酵食品の存在と種類などの集団間比較が重要な研究対象であることが判明している。

対象とする項目は、稲作関係として、稲の系統 (strain) 内の遺伝的な多様性、育種学・民俗植物学的な分析：陸稲・水稲 / モチ・ウルチ / 早稲・中手・晩生 / 色、品種ごとの農耕暦・休閑期間 (annual/rotation/fallow)、栽培地の空間分割・所有権・移動、混栽される作物の種類、道具の複合、播種儀礼・収穫儀礼・供犠・神話であり、諸集団間の比較を通じて、本地域の稲作文化複合とその変容を明らかにしたい。

淡水漁撈関係の項目として、淡水魚の種類と漁具の関係、季節的な魚の回遊と漁具の使い分け、漁場の占有・所有関係、漁具の製作と材料・製作者、所有関係、漁労をめぐる儀礼と供犠・神話などであり、諸集団間の比較を通じて、本地域の淡水漁撈文化複合とその変容を明らかにしたい。あわせて、稲作と淡水漁撈文化の結合した魚の発酵食品 [石毛、ラドル 1985] についての、名称、製造方法、用いられる魚とその入手方法、地域的な変異、消費における自給性・商業性の問題などを明らかにしたい。

文化項目と対象民族の最終的な選定は平成17年度の大きな課題であることはいままでもない。分析の方法として、過去の民族誌 (1970年代まで) と現代における状況とを比較対照して、民族間・集団間の関係をク

ラスター分析によって検討することを次年度の目標としてかかげ、併せて現在進行中の各地域における野外調査の資料を加えることで、精度の高い研究を目指したいと考えている。

1-3. 地域生態史とプロキシからの展開

ゴムの事例からも明らかなように、地域生態史を構築するさいに、具体的な資源を対象として、その生産と流通、利用の多様性、文化的な意味、価値の変容、グローバル経済との関連性、植民地政府や国家政策との関係、環境保全と商業的利用の葛藤などの多様な側面にわたっての社会経済学的な分析をすることが可能である。とくに、稲作と淡水漁撈の文化複合からみられるさまざまな換金作物や資源に注目してプロキシによる研究をおこなう意義があるとおもわれる。

プロキシの選定については、自発的な創意に基づいて各班員から提示されるべきと考えるが、最終的には個々の項目について地域横断的、歴史的な利用の多様性と変容についての情報を収集し、相互の討論と研究会を通じた生態史における位置づけを試みることを目標とする。

これまでの経緯から候補となる項目としては、ゴム、カーダモン、ケシ、籐、竹、カワシオグサ、赤米、トウガラシ、トウモロコシ、チャ、ジュズダマ、イチジク、ヒョウタン（以上、植物）、カニ、カワニナ、メコンオオマズ、スクミリンゴガイ、魚醤、野鶏、水牛、カメムシ、ラック貝殻虫、野蚕（以上、動物）、非生物としての岩塩、土などが考えられる。

すでに、カーダモン（横山智ら、雲南大学の李）[李 建欽 2004]、カワシオグサ（鯉坂哲朗）、ジュズダマ（落合雪野）、水牛（高井康弘）、カメムシ（野中健一）、メコンオオナマズ（秋道智彌）、野鶏（秋道智彌）[秋道印刷中]、チャ（李）[李 全敏 2004] などについての研究が進められている。さらに、個別の生物種だけでなく、水田の昆虫食、家庭菜園の構成種、魚毒植物など、複数の種を対象としたプロキシの設定も重要な課題であろう。最後に、個々のプロキシとなる生物についての生態史的な論考を全体としてまとめるものとして、図録ないし解説本を公刊したいと考えている。

以上の生態年代記、稲作・淡水漁撈文化複合、プロキシ研究を地域生態史研究のなかで有効な武器として活用できればと考えている。以下の節では、生態年代記の研究作業を立ち上げるにいたった経緯について述べ（田口・宮脇）、中国における『県誌』を生態年代記の研究として利用する学術的な意義と位置付けについて解説を加える（兼重）。さらにラオスの現代史に言及しながら医療史の研究を踏まえた問題提起をおこなう（西本）。

文 献

秋道智彌 1990

「漁撈 1200」大林太良、杉田繁治、秋道智彌編 『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』（国立民族学博物館研究方向別冊 11 号）国立民族学博物館、34—37 頁。

秋道智彌 1995

「魚毒漁の分布と系譜」吉田集而編 『生活技術の人類学』平凡社。

秋道智彌 2005

「変貌する森林と野鶏—中国雲南省・ラオスの少数民族における事例」池谷和信編 『アジアの森と森の民』人文書院、123-148 頁。（印刷中）

Anderson, Edward E. 1993

Plants and People of the Golden Triangle: Ethnobotany of the Hill Tribes of Northern Thailand. Chiang Mai: Silkworm Books.

Burkill, I.H. 1993 (First edition 1936)

A Dictionary of the Economic Products of the Malay Peninsula. Kuala Lumpur: Publication Unit Ministry of Agriculture Malaysia.

大林太良、杉田繁治、秋道智彌 1990

『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』（国立民族学博物館研究方向別冊 11号）国立民族学博物館。

Gimlette, John D. 1991

Malay Poisons and Charm Cures. Singapore: Oxford University Press.

石毛直道、ケネス・ラドル 1985

『魚醬とナレズシの研究』岩波書店。

川田順造、大貫良夫編 2000

『生態の地域史』（地域の世界史4）山川出版社。

李 全敏 2004

「徳昂族与茶—生態環境史的基礎調査」（雲南生態史シンポジウム発表論文）2004年10月

李 建欽 2004

「雲南金平烏苦寨哈尼族草果種植与生態變遷影響分析」（雲南生態史シンポジウム発表論文）2004年10月

Pauline, Phon 2000

Plants used in Cambodia. Phnom Penh: Imprimerie Olympic.

羅 鈺 1996

『雲南物質文化 採集漁獲卷』雲南教育出版社。

佐々木高明 1990

「東南アジア・オセアニアの生業形態と物質文化の分布—「生態環境と文化複合」という課題に沿って」大林太良、杉田繁治、秋道智彌編『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』（国立民族学博物館研究方向別冊11号）国立民族学博物館、237—271頁。

思茅地区地方志編纂委員会編 1995

『思茅地方志 上冊』雲南民族出版社。

下川耿史編 2003

『環境史年表 1868—1926 明治・大正編』河出書房新社。

下川耿史編 2004

『環境史年表 1926—2000 昭和・平成編』河出書房新社。

盈江県志編纂委員会編 1997

『盈江県志』昆明：雲南民族出版社。

尹紹亭、深尾叶子主編 2003

『雨林啊胶林』雲南教育出版社。